

重信川河口鳥類調査報告書（概要版）

1996. 6—2021. 5



日本野鳥の会愛媛
重信川河口鳥類調査研究グループ

表紙の写真

アジサシ (大瀬戸光明)	キョウジョシギ (♂夏羽) (大瀬戸光明)	ミヤコドリ (大瀬戸光明)
オオジュリン (大瀬戸光明)	トウネン (夏羽) (岩本 孝)	シマアジ (♂) (大瀬戸光明)
ダイゼン (夏羽) (大瀬戸光明)	キンクロハジロ (手前左♂, 右♀) スズガモ (奥♀) (谷川昭司)	キジ (♂) (大瀬戸光明)
オオタカ (♂成鳥) (岩本 孝)	チュウシャクシギ (大瀬戸光明)	ソリハシシギ (大瀬戸光明)

重信川河口鳥類調査報告書の出版によせて

日本野鳥の会愛媛 代表 松田久司

この重信川河口鳥類調査報告書は、四半世紀もの長期に及ぶ調査の一つの節目としてまとめられたものです。これまで調査に協力していただいた多くの方々、そしてその中心となり本報告書のまとめに携わった関係者の皆様に、心から感謝を申し上げ、活動を継続されてきた並々ならぬ努力に対して、深く敬意を表します。

重信川河口は、愛媛県内では西条市の加茂川河口などとともに、環境省によって「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」に選定されています。また国土交通省、愛媛県、松山市、松前町と複数の行政区にまたがっていることから、多くの市民が利用する生活や憩いの場所となっています。河口の水質浄化作用など含め、自然の恩恵を受け我々が豊かな生活を送るための「生態系サービス」を提供する場としても、その文化的・経済的価値はかけがえのないものです。

行政や地域住民に重信川河口の鳥類相の豊かさ、そしてその重要性を伝え、環境回復や保全策を講じるうえで、この報告書が将来の長きに亘り活用されることを期待しています。

調査報告書の発行にあたって

日本野鳥の会愛媛 副代表 小川次郎

県内に数ある採鳥地の中でも特に魅力的な重信川河口において、1996年に岩本さんが調査を始めることを決意されました。当時まだ大学生だった私は、毎月、複数のメンバーですべての鳥をカウントするこの調査に採鳥会という側面もあると感じ、初回から可能な限り参加していました。実際、鳥の識別やカウントに慣れたベテランだけでなく初心者も参加者もあり、特に開始当初は大人数で賑やかでした。次第に調査メンバーが固定されてきたのは、「調査」という名前のため、気軽に参加できないと感じている会員さんが多いためかもしれません。しかし、識別やカウントに自信がなくても、調査メンバーについて歩くだけで勉強になり楽しめると思っていますので、まだ参加したことのないという会員さんにもぜひ一度参加してみてもらいたいものです。

さて、本報告書の中でもデータとともに示されているように、重信川河口に飛来する渡り鳥の個体数が大きく減少していることを私自身も実感しています。干潟で採餌するシギ・チドリ類、水面に浮かんで休息するカモ類、浅瀬で水浴びするカモメ類などが多数見られた頃を知っている者としては本当に寂しい限りです。特に、干潟を餌場としている鳥たちの減少は全国的な傾向でもあるようですが、重信川河口においては干潟の底質の変化が見られますので、そのことと関連があるのか、またその変化が起こった原因が何であるかが気になるところです。それらを探るために今後も調査を継続し、データを蓄積していく必要があるでしょう。そして将来、干潟に再び多くの渡り鳥たちが戻ってきてくれることを願っています。

重信川河口鳥類調査報告書

1996. 6～2021. 5

岩本 孝・秋山 勉・谷川昭司・脇 啓人

日本野鳥の会愛媛

重信川河口鳥類調査研究グループ

はじめに

1996 年 3 月に開かれたラムサール条約ブリスベン会議において「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類渡来地ネットワーク」が発足した。日本は谷津干潟と吉野川河口が参加したが、日本湿地ネットワーク (JAWAN) としては、これだけでは不足であるとして、残る干潟を「シギ・チドリ類渡来地ネットワーク」に参加させるために運動を始めた。そこで日本野鳥の会愛媛県支部（現在は日本野鳥の会愛媛）にも依頼があり、加茂川河口と重信川河口が対象になった。このことをきっかけとして、シギ・チドリ類だけでなく全種類を定期的に調べる調査を開始した。この報告書は、1996 年 6 月から 2021 年 5 月まで 25 年間 372 回の調査結果をまとめたものである。

調査の目的

そもそも重信川河口にはいったいどれだけの鳥類が来るのだろうかという疑問からだった。非常に多くの鳥がいるのは分かっていたが、はっきり調べることがなかったので、全体像がつかめていなかった。そこで、まず調査範囲を設定して定期的にモニタリングすることで種類数・個体数の変動を分析し、鳥類相を把握することにした。そして、その結果を基に重信川河口の環境について鳥類の視点から考察することを目的とした。

また、愛媛県一斉のカモ類調査や、環境省が実施する「モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類等調査」へデータを提供することで、保護活動に寄与するとともに、他地域との比較によって重信川河口の環境レベルを把握することができる。

調査活動

1 調査対象種 全種類

2 調査頻度

原則として毎月 1 回。ただし 1 月、4 月、9 月は 2 回実施する。調査開始当初は 8 月に 2 回実施した年度もある。また、都合で 3 回実施した月や天候不順やコロナウイルス感染拡大のため、予定が 2 回のところ 1 回になった月もある。本調査では 6 月から翌年の 5 月までを単年度としている。

3 調査方法

南岸（左岸）と北岸（右岸）に分かれて、原則として河口から上流に向かって移動しながら重複しないようにに連絡を取りあい、同時に全種類をカウントした。調査員のスキルがアップし人数も 5 名になった終盤にはカウントの精度を上げるため、5 つの担当区域に分割し、同時にカウントする方法をとった。

4 調査範囲

図 1 の赤線の枠内を調査範囲とした。ただし、海上は望遠鏡で識別できる範囲とした。

5 調査用紙

調査用紙は「南岸」（図 2）、「北岸」（図 3）、「調査結果」（図 4）の A4 用紙 3 枚で構成されている。確認さ

重信川河口鳥類調査表 (4月)

[illegible]

重信川河口鳥類調査表 (4月)

[illegible]

重信川河口鳥類調査表 (4月)

[illegible]

図4 調査用紙「調査結果」

全国レベル調査への参加

- 1 シギ・チドリ全国カウント（日本湿地ネットワーク主催）
1996 年春～1998 年秋（春・秋）6 回
- 2 シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査（環境省主催）
1999 年冬～2003 年冬（冬・春・秋）13 回
- 3 モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類等調査（環境省主催）
2004 年春～現在継続中（春・秋・冬）

おもな出来事

1996 年 12 月～ 第 1 期左岸側護岸工事
1997 年 6～7 月 コアジサシが中洲で繁殖
1997 年 11 月～ 第 2 期左岸側護岸工事
1998 年 10 月～1999 年 2 月 第 3 期左岸側護岸工事
1998 年 2 月～2003 年 11 月 川口大橋付け替え工事
1999 年 6 月 20 日 アカウミガメが中洲に産卵
2008 年 10 月～2012 年 3 月 重信川自然再生事業（河口ヨシ原再生工事）
2017 年 9 月 17 日 台風 18 号による豪雨
2017 年 11 月～2019 年 3 月 水管橋橋脚耐震工事
2020 年 9 月～2021 年 2 月 大新田床止改修工事

重信川河口の環境

左岸河口部



2000 年 11 月 22 日撮影



2021 年 5 月 8 日撮影

種の年度別各月カウント数および解説（抜粋）

次のページから、種の解説と各月のカウント数を年度ごとにまとめた表を示す。月に 2 回以上調査した場合は、各種について最大値をその月の結果とした。種の解説は 174 種を 4 名が分担して執筆した。

なお、種の配列は「日本鳥類目録改訂第 7 版」（日本鳥学会（目録編集委員会）編、2012、日本鳥学会）による。また、表中の「List No.」は上記目録の「種」につけられた番号である。

No.	List No.	キジ目キジ科	年度	各月カウント数												最大値
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
1	3	ウズラ <i>Coturnix japonica</i>	1996													
			1997													
			1998													
			1999													
			2000													
			2001													
			2002													
			2003													
			2004													
			2005													
			2006													
			2007													
			2008													
			2009													
			2010													
			2011													
			2012													
			2013													
			2014													
			2015													
			2016						1							1
			2017													
			2018													
			2019													
			2020													
			頻度						1							1
			合計						1							1
			平均													
			最高						1							1
			最低													

冬鳥として平地の草むらに渡来する。25年間で一度だけ確認。左岸側の草の陰に隠れていて、かなり近づくまで逃げなかった。人や車が頻繁に行き交うこのような環境にウズラが生息しているとは予想していなかったのが驚いた。絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省)、情報不足(DD) (愛媛県)に指定されている。(1)

No.	List No.	キジ目キジ科	年度	各月カウント数												最大値
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
2	5	キジ <i>Phasianus colchicus</i>	1996													
			1997		1									2	1	2
			1998											1		1
			1999													
			2000													
			2001											1		1
			2002				1						1			1
			2003												1	1
			2004													
			2005				4							3		4
			2006		2							1	1	2	1	2
			2007	1										3		3
			2008	1				2						3	1	3
			2009										2	1	1	2
			2010											2		2
			2011													
			2012									1		2	2	2
			2013										1	4	1	4
			2014								1		2	2	1	2
			2015	1										2		2
			2016	1										1	2	2
			2017						1					2	1	2
			2018							1				5	3	5
			2019	7	1		2					1	1	3	2	7
			2020	2			5		1					2	3	5
			頻度	6	3		4	1	2	1	1	3	7	18	13	20
			合計	13	4		12	2	2	1	1	3	10	41	20	53
			平均	0.5	0.2		0.5	0.1	0.1			0.1	0.4	1.6	0.8	2.1
			最高	7	2		5	2	1	1	1	1	2	5	3	7
			最低													

留鳥で日本の国鳥。河川敷の草むらにすることが多くなかなか姿を見せられないが、近年、声を聞く機会が増えた。時には親がヒナを連れて河原を横切る姿を目撃することもある。(1)

No.	List No.	カモ目カモ科	年度	各月カウント数												最大値	
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
9	27	ヨシガモ <i>Anas falcata</i>	1996					4	7	25	63	23	44	1	5	63	
			1997					2	28	38	47	51	49	35		51	
			1998					5	59	27	61	53	45	18	1	61	
			1999	2	1			12	14	16	37	19	23	14	3	37	
			2000					34	53	32	27	47	27	25	7	53	
			2001				2	4	27	17	29	63	64	21		64	
			2002					18	104	47	67	71	81	17		104	
			2003					6	8	40	44	77	54	19		77	
			2004						35	18	45	77	77	51		77	
			2005					1	10	19	62	67	37	12	3	67	
			2006					2	16	53	53	52	80	33		80	
			2007					6		33	38	87	74	32	1	87	
			2008					1	9	23	46	53	56	24		56	
			2009						2	21	22	36	48	16	7	48	
			2010						13	11	9	17	60	17		60	
			2011					2	2	4	36	42	52	15		52	
			2012						2	17	10	3	31	2		31	
			2013							8		12	16	70	12		70
			2014					2		17	5	10	13	12		17	
			2015						2		2			4		4	
			2016					1				1	5			5	
			2017									42		4		42	
			2018							3	1	2	23	2		23	
			2019						2				31	2		31	
			2020							2		4				4	
			頻度	1	1		1	15	19	20	21	23	22	23	7	25	
			合計	2	1		2	100	401	463	716	913	1044	388	27	1264	
平均	0.1			0.1	4	16	18.5	28.6	36.5	41.8	15.5	1.1	50.6				
最高	2	1		2	34	104	53	67	87	81	51	7	104				
最低													4				
冬鳥として渡来し、河川、池沼等に生息する。県一斉のカモ類調査では県全体で60～150羽程度である。重信川河口にはそのうちの20%～50%が渡来している。近年は干潟に姿を見せることは少なくなり、主として調査範囲外の海側貯木場で20～30羽程度が見られる。(Y)																	

No.	List No.	カモ目カモ科	年度	各月カウント数												最大値
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
10	28	ヒドリガモ <i>Anas penelope</i>	1996	5	6	4	6	1063	648	739	1331	1333	1045	139	15	1333
			1997	3	3	3	11	430	732	1016	1054	729	997	670	1	1054
			1998				1	593	501	789	1236	977	1013	202	7	1236
			1999	1	3	1	3	210	1026	861	890	935	428	364	6	1026
			2000					997	771	724	907	1082	1189	830	15	1189
			2001		1	3	3	310	541	436	656	798	890	666	8	890
			2002				1	369	497	400	613	674	796	372	14	796
			2003	6		2	3	318	553	435	561	824	839	1077	20	1077
			2004	5	7	7	7	159	393	324	715	748	842	1124	7	1124
			2005	7	9	8	7	393	427	394	694	688	1073	301	29	1073
			2006	4	8	9	5	301	392	510	711	623	1256	737	6	1256
			2007	7	8	10	13	290	262	474	636	732	849	806	18	849
			2008	19	15	18	40	437	455	406	558	578	579	433	14	579
			2009	8	7	10	14	238	261	391	642	657	467	587	46	657
			2010	15	8	16	13	241	210	351	529	1112	964	260	13	1112
			2011	8	7	5	9	366	114	280	892	679	895	569	7	895
			2012		5	3	4	41	182	367	745	545	956	547	21	956
			2013		5	5	9	664	271	234	575	575	982	342	7	982
			2014	4	3	3	4	244	328	315	341	713	539	303		713
			2015	1	3	2	3	148	266	278	305	624	646	605		646
			2016	1				179	285	360	345	844	1024	742	6	1024
			2017				1	16	288	224	705	964	796	414	1	964
			2018				6	32	111	320	647	602	721	204		721
			2019				15	26	202	201	437	611	851	184	5	851
			2020					47	101	209	359	402	347	269	43	402
			頻度	15	16	17	22	25	25	25	25	25	25	25	22	25
			合計	94	98	109	178	8112	9807	11038	17084	19049	20984	12747	309	23405
平均	4	4	4	7	325	392	442	683	762	839	510	12	936			
最高	19	15	18	40	1063	1026	1016	1331	1333	1256	1124	46	1333			
最低					16	101	201	305	402	347	139		402			
冬鳥として渡来する。重信川河口での越冬数は、当初1000羽を超えていたが近年は300～400羽前後に減少した。本種は重信川河口においてカモ類中最も数が多い。秋の渡来が早く春の渡去が遅いため、重信川河口では最も長い期間見られるカモである。(Y)																

No.	List No.	ペリカン目 トギ科	年度	各月カウント数											最大値												
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月		5月											
45	154	クロツラヘ ラサギ <i>Platalea minor</i>	1996																								
			1997																								
			1998			1	1	1																			1
			1999										1														1
			2000																								
			2001																								
			2002																								
			2003																								
			2004																								
			2005																								
			2006																								
			2007																								
			2008																								
			2009		1				1				1														1
			2010																								
			2011																								
			2012																								
			2013										1														1
			2014																								
			2015																								
			2016																								
			2017																								
			2018																								
			2019					1																			1
			2020		1																						1
			頻度			2	1	2	2			1	2														6
合計			2	1	2	2			1	2														6			
平均			0.1		0.1	0.1				0.1														0.2			
最高			1	1	1	1			1	1														1			
最低																											

日本には冬鳥として主に九州や沖縄に渡来する。東予地方の加茂川河口にも冬鳥として頻繁に渡来している（愛媛県東予地方鳥類目録）が、重信川河口では少なく季節も不規則である。絶滅危惧ⅠB類(EN)（環境省）、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)（愛媛県）に指定されている。(1)

No.	List No.	ツル目ツル科	年度	各月カウント数											最大値			
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月		5月		
46	157	マナヅル <i>Grus vipio</i>	1996															
			1997															
			1998															
			1999															
			2000															
			2001															
			2002															
			2003															
			2004															
			2005															
			2006								1	1						1
			2007															
			2008															
			2009															
			2010															
			2011															
			2012															
			2013															
			2014															
			2015															
			2016															
			2017															
			2018															
			2019															
			2020															
			頻度								1	1						1
			合計								1	1						1
平均															0			
最高								1	1						1			
最低																		

日本には冬鳥として九州に渡来数が多い。本調査で記録されたのは2006年度のみである。過去には何回か飛来しているようだ。絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県) に指定されている。(I)

No.	List No.	チドリ目 シギ科	年度	各月カウント数												最大値		
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月			
69	227	チュウシヤ クシギ <i>Numenius phaeopus</i>	1996	9	9		1							208	125	208		
			1997	12	15									151	3	151		
			1998	6	6	2	5							37	25	37		
			1999	6		1	3							68	39	68		
			2000	2	1		2							124	41	124		
			2001		1		3							88	32	88		
			2002											95	43	95		
			2003				1							55	37	55		
			2004	1										31	9	31		
			2005				1							27	31	31		
			2006				2							63	30	63		
			2007	6	5	1	5	1	1					56	29	56		
			2008		1									67	13	67		
			2009											55	31	55		
			2010											50	27	50		
			2011											37	30	37		
			2012				1							37	28	37		
			2013			1								79	40	79		
			2014											35	18	35		
			2015				6							33	4	33		
			2016		1	1	2							20	48	48		
			2017											31	11	31		
			2018											24	11	24		
			2019				2							21	1	21		
			2020				1							27	33	33		
			頻度			7	8	5	14	1	1					25	25	25
			合計			42	39	6	35	1	1					1519	739	1557
平均			1.7	1.6	0.2	1.4							60.8	29.6	62.3			
最高			12	15	2	6	1	1					208	125	208			
最低													20	1	21			

旅鳥であるが、重信川河口ではほとんど春に集中していて4月下旬から5月上旬がピークである。これは、渡りのルートが春と秋で異なっているからではないだろうか。渡来数は調査開始当初200羽を超えていたが、その後は急激に減少している。(I)

No.	List No.	チドリ目 シギ科	年度	各月カウント数												最大値	
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
70	230	ダイシャク シギ <i>Numenius arquata</i>	1996											1		1	
			1997		1											1	
			1998												1		1
			1999														
			2000														
			2001														
			2002														
			2003			1								1	1	1	1
			2004		1	1											1
			2005														
			2006														
			2007												1		1
			2008														
			2009												1		1
			2010														
			2011											1			1
			2012														
			2013														
			2014												1		1
			2015														
			2016														
			2017														
			2018														
			2019														
			2020														
			頻度			2	2								2	5	2
合計			2	2								2	5	2	9		
平均			0.1	0.1								0.1	0.2	0.1	0.4		
最高			1	1								1	1	1	1		
最低																	
旅鳥。重信川河口ではホウロクシギより渡来数は少ない。ホウロクシギに似ているので識別には注意が必要。(1)																	

No.	List No.	スズメ目 メジロ科	年度	各月カウント数												最大値	
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		
139	485	メジロ <i>Zosterops japonicus</i>	1996							1	3					3	
			1997			1				1						1	
			1998							6	44	58	2				58
			1999									4			1		4
			2000					1	5		17	12	23				23
			2001				2			5	2	3					5
			2002							22	10		4	1	1		22
			2003									1	1				1
			2004					4		4	13	2	2	8	1		13
			2005														
			2006					1		2	3	6		2			6
			2007							12	2	6	17	1			17
			2008						1		6	2	12				12
			2009								2		8	24	2		24
			2010							2	4	1		4			4
			2011														
			2012									7	6	1	1		7
			2013	1										6		2	6
			2014									17	2		2	1	17
			2015		1			2	1								2
			2016							9	9	1		1			9
			2017							1		4	1				4
			2018							1	12		1				12
			2019					1			8	5	31				31
			2020							1	53	13	4				53
			頻度	1	1	1	1	5	3	13	17	16	14	9	6		23
			合計	1	1	1	2	9	7	67	212	126	113	44	8		334
平均				0.1	0.4	0.3	2.7	8.5	5	4.5	1.8	0.3		13.4			
最高	1	1	1	2	4	5	22	53	58	31	24	2		58			
最低																	
留鳥。重信川河口でも周年見られるが、夏季は少ない。河口や貯木場沿いの樹木上で見られる。2005年度と2011年度は、年間通して観察されなかった。(W)																	

No.	List No.	スズメ目 ヨシキリ科	年度	各月カウント数												最大値
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
140	492	オオヨシキリ <i>Acrocephalus orientalis</i>	1996	10	3										3	10
			1997	17	15	1							6	12	17	
			1998	13	1	1								5	5	13
			1999	7	1									2	9	9
			2000	7		2								3	8	8
			2001	7	2		1							3	2	7
			2002	9										4	6	9
			2003	10		2								2	8	10
			2004	8	1	1								1	10	10
			2005	14	1									9	15	15
			2006	16	1									8	11	16
			2007	9		1								4	7	9
			2008	14	2									5	7	14
			2009	7										2	12	12
			2010	7	4									2	4	7
			2011	7	1									9	11	11
			2012	8			1							3	11	11
			2013	11	10		1							3	11	11
			2014	13										3	9	13
			2015	15	7										7	15
			2016	5	1	2									7	7
			2017	4										3	5	5
			2018	8										4	8	8
			2019	14	5		1								10	14
			2020	8											4	8
			頻度	25	15	7	4							20	25	25
			合計	248	55	10	4							81	202	269
平均	9.9	2.2	0.4	0.2							3.2	8.1	10.8			
最高	17	15	2	1							9	15	17			
最低	4											2	5			

夏鳥として渡来し、ヨシ原で「ギョギョシ、ギョギョシ」と大きな声でさえずる。声を頼りにヨシの先端付近を探すと、中が橙赤色の口を大きく開けてさえずっている姿を見ることが出来る。重信川河口では5月、6月が最もにぎやかで、7月に入ると急に静かになる。ここでは数羽がいが繁殖していると思われる。(A)

No.	List No.	スズメ目 ホオジロ科	年度	各月カウント数												最大値
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
173	624	アオジ <i>Emberiza spodocephala</i>	1996							2	4	4	8	11		11
			1997						2	3	9	6	5	3		9
			1998						3	5	6	7	8			8
			1999						2	4	4	7	5	3		7
			2000						3	2	9	10	6	4		10
			2001						1	4	4	4	2	9		9
			2002						2	3	3	6	4	3		6
			2003						1	1	1	2	3	3		3
			2004							1	11	2	2	4		11
			2005						1	2	3	4	9	4		9
			2006								5	2	1	4		5
			2007							2	3	2	2			3
			2008						2		1	1	2	1		2
			2009							1	2	1	3	2		3
			2010							5	3	1		2		5
			2011										1			1
			2012								8	3	8	8		8
			2013						1	1	1	4		2		4
			2014						1		1	2	3	3		3
			2015								1	2	2	6		6
			2016							1		5	1	1		5
			2017						1		3					3
			2018								2	2	1			2
			2019							1	1			1		1
			2020									2				2
			頻度						12	16	22	22	20	19		25
			合計						20	38	85	79	76	74		136
			平均						0.8	1.5	3.4	3.2	3	3		5.4
			最高						3	5	11	10	9	11		11
			最低													1

冬鳥として11月頃渡来する。河川敷の藪やヨシ原などにいるが、なかなか姿を見せないのでも多く、2011年度の冬は全国的に冬鳥が少なかったようで、記録は3月の1羽のみである。近年は記録されない月もあり、個体数は減少傾向である。2017年9月の台風18号や水管橋の工事も影響していると思われる。(A)

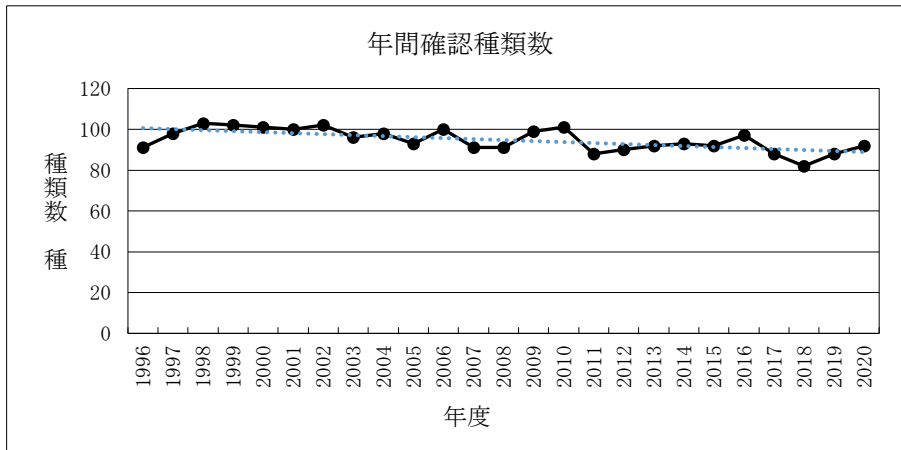
No.	List No.	スズメ目 ホオジロ科	年度	各月カウント数												最大値
				6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
174	628	オオジュリン <i>Emberiza schoeniclus</i>	1996						7			6	3			7
			1997						3	4	2	5				5
			1998							3	5		4			5
			1999						4	1	4	16	4			16
			2000								8	12	11			12
			2001							5						5
			2002						3	13	2					13
			2003									1	2			2
			2004								4			2		4
			2005										10			10
			2006									3	3			3
			2007						2							2
			2008									13				13
			2009													
			2010								2	1				2
			2011										5			5
			2012								1	8	20			20
			2013								1	5	1			5
			2014					1					11			11
			2015									1	1	2		2
			2016							1		1				1
			2017									2				2
			2018									1				1
			2019								3					3
			2020													
			頻度					1	5	6	10	14	12	2		23
			合計					1	19	27	32	75	75	4		149
			平均						0.8	1.1	1.3	3	3	0.2		6
			最高					1	7	13	8	16	20	2		20
			最低													

冬鳥。ヨシ原で、茎にとまって探餌するのが良く見られる。ここ数年は記録されない年もあり、個体数も減少傾向である。2017年9月の台風18号による豪雨で、ヨシ原が大きなダメージを受けた影響もあるかもしれない。(A)

解析結果

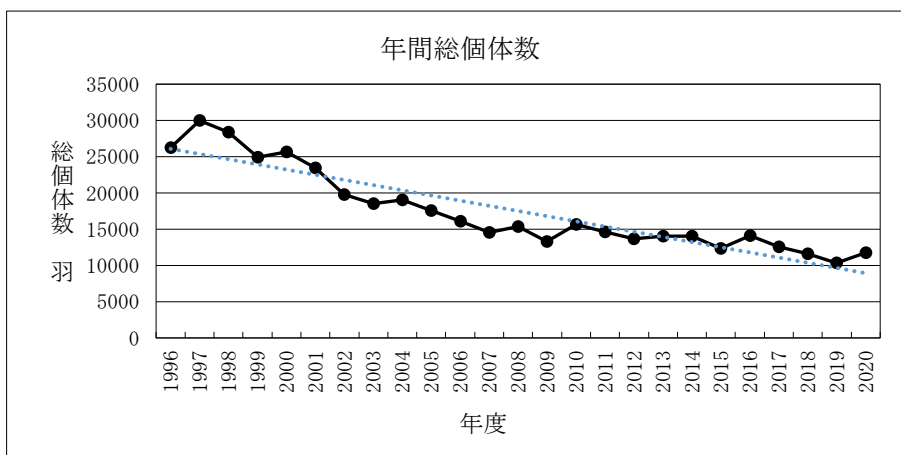
1 全体の解析

(1) 種類数の推移



各年度に確認された種類数の推移である。徐々に減少している。

(2) 年間総個体数の推移

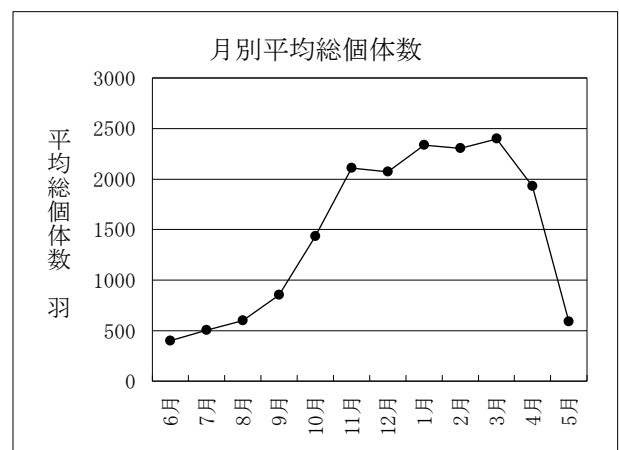
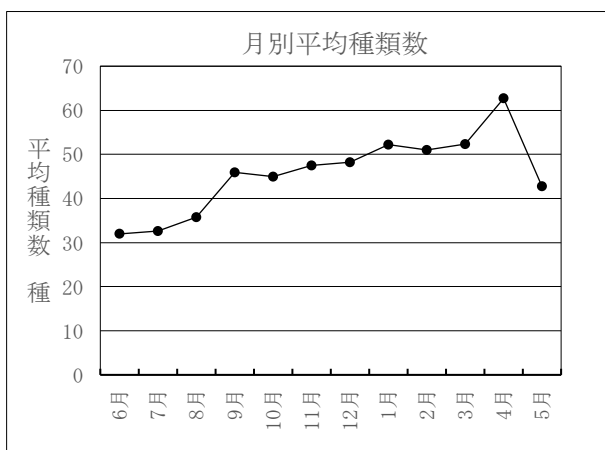


年間総個体数とは、毎月の調査でカウントされた個体数を1年間分合計した数である。ただし、月に2回以上調査した場合は、各種について最大値を採用している。

調査開始当初から大幅に減少していることがわかる。

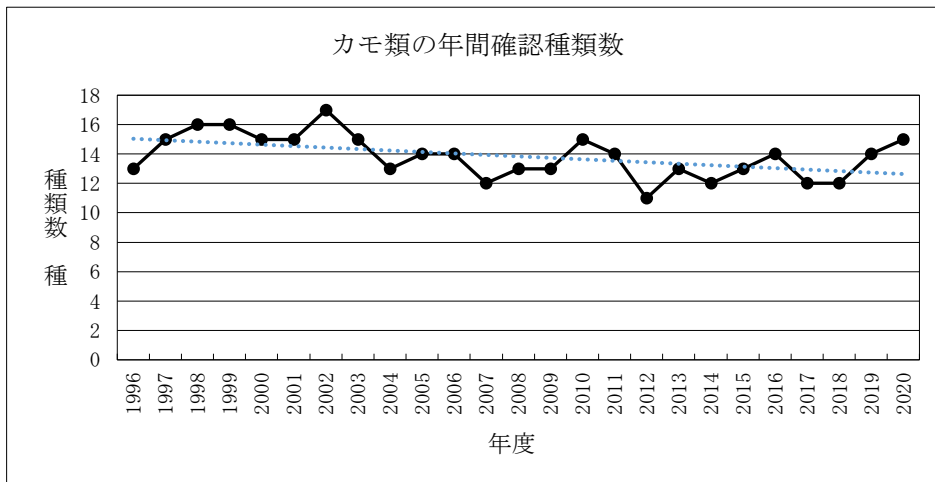
(3) 月別平均種類数および平均総個体数

平均種類数は各月ごとに確認された種類数の25年平均、平均総個体数は各月ごとにカウントされた全種類総個体数の25年平均である。種類数は4月、総個体数は3月が最大となっている。種類数が4月に最大となっているのは、冬鳥、特にカモ類が残っているうえに、旅鳥であるシギ・チドリ類が渡来するからと考えられる。また、総個体数が3月に最大となっているのは、シギ・チドリ類は3月に一時減少するものの、カモ類はまだほとんどの個体が残っているからだろう。



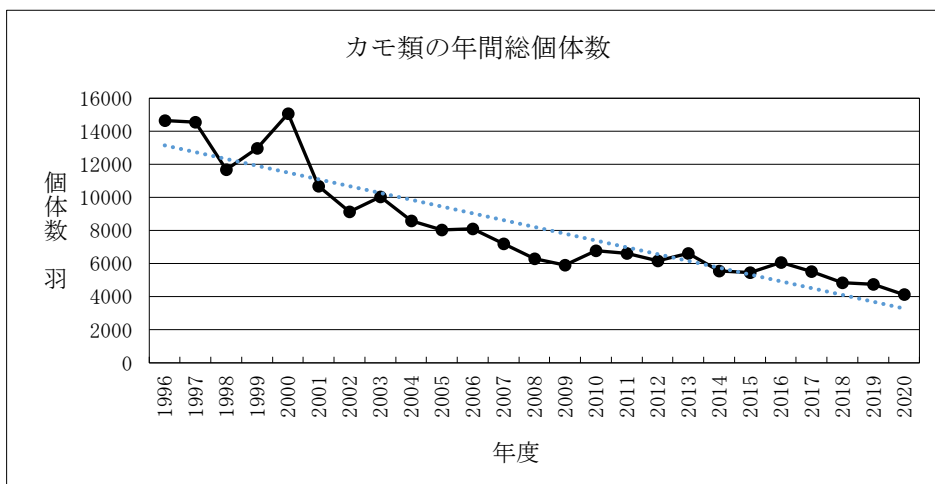
2 カモ類の解析

(1) 種類数の推移



各年度に確認された種類数は、増減を繰り返しながら徐々に減少している。

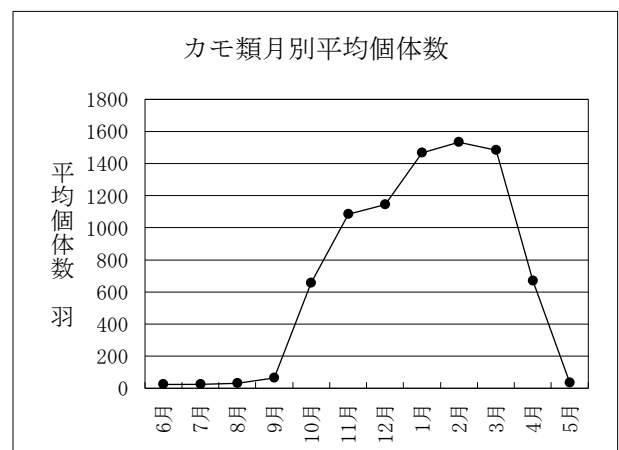
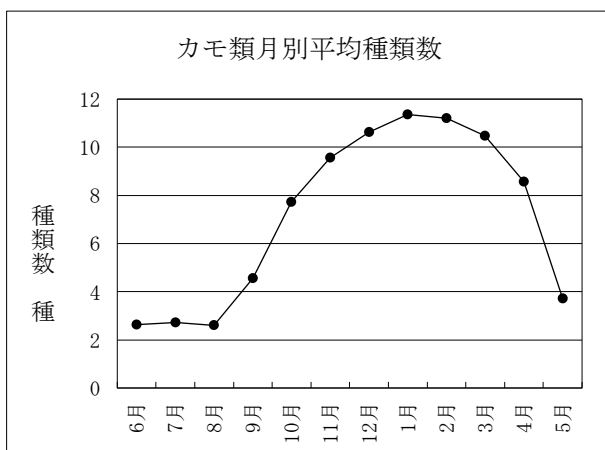
(2) 総個体数の推移



各年度にカウントされた総個体数は、著しく減少している。カモ類にとっての生息環境が悪化していることの現れだろう。

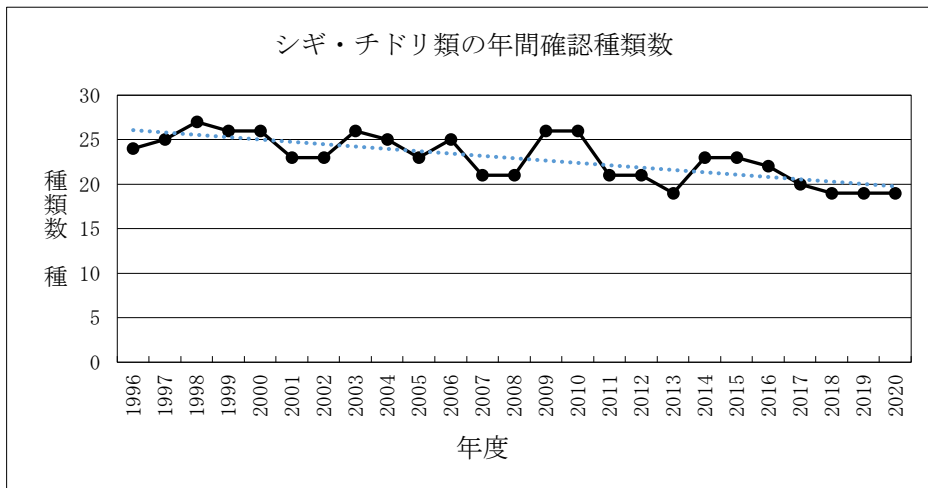
(3) 月別平均種類数および平均個体数

25年間の平均をとると種類数は1月が、個体数は2月が最大になった。また、種類数は1、2月が多く、個体数は1～3月が多くなっている。3月は種類数が12月と同程度であるにもかかわらず、個体数は12月よりかなり多くなっている。これは、まだ多くの個体が残っており、移動途中の個体も重信川河口に集まるからではないかと考えている。



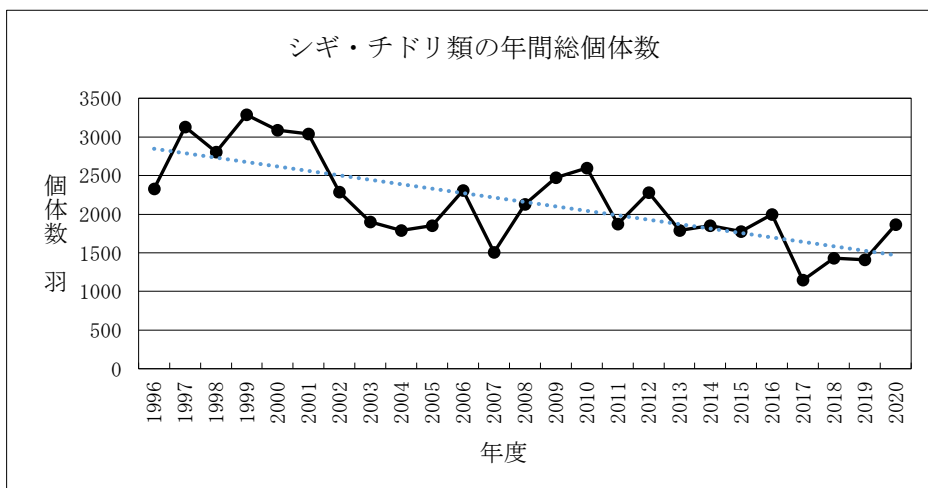
3 シギ・チドリ類の解析

(1) 種類数の推移



徐々に減少している。オグロシギやオジロトウネンなど当初確認されていた種も最近は見られなくなった。

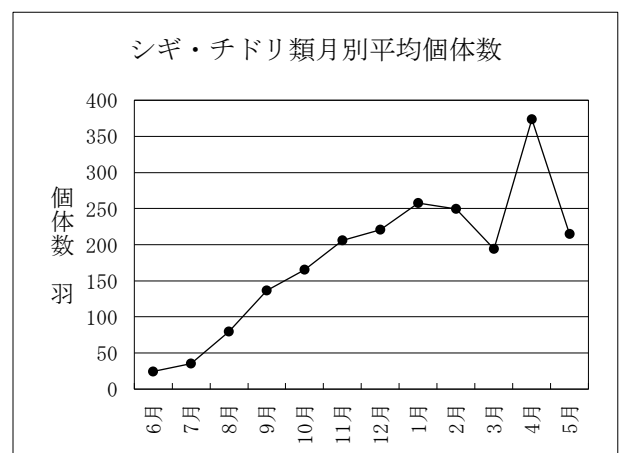
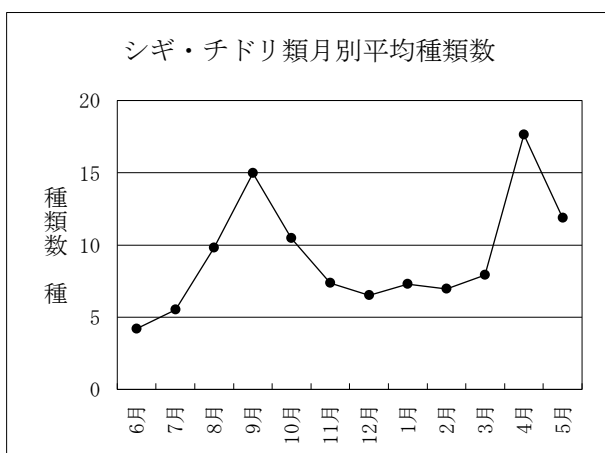
(2) 総個体数の推移



シギ・チドリ類の個体数は、渡来数の多いチュウシャクシギとハマシギに左右される。この総個体数推移は、(4)の後の「補足」に示すチュウシャクシギとハマシギの各年度別合計推移とほぼ一致している。

(3) 月別平均種類数および平均個体数

これらのグラフは、各月について25年間の平均をとったものである。シギ・チドリ類の多くが旅鳥のため、種類数は9月と4月にピークがある。個体数の規模はチュウシャクシギとハマシギに左右される。チュウシャクシギは、秋にはほとんど渡来せず4月に集中する。また、ハマシギは10月ごろから渡来し始め、一時3月に少なくなるが4月になると増加するのでこのようなグラフになると思われる。



4 各年度の結果分析および状況（抜粋）

1996 年度重信川河口鳥類調査結果（1996 年 6 月～1997 年 5 月）

1 はじめに

1996 年 6 月から 1997 年 5 月まで、1 年間の調査結果を報告する。データは貯木場を含む。重信川河口の鳥類を把握するため調査を開始した。おおむね月一回のペースである。

2 調査参加者(1996)

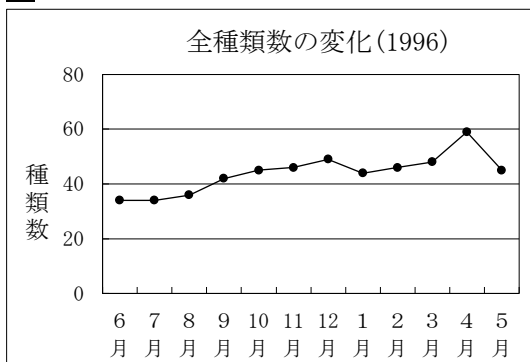
秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、谷川昭司、小川次郎、大西 力、岡 秀郎、秋山勁三、亀嶋一哉、桑原文典、河野 薫、清水はつゑ、白石勝博、末岡高則、鈴木玲子、辻田晋子、中橋 巧、平井秀信、水野静子、水口玲子（合計 20 名）

3 調査日および調査回数(1996)

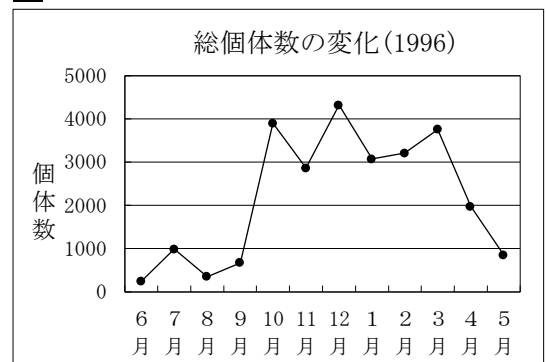
1996/6/16、7/14、8/25、9/15、10/27、11/10、12/22、1997/1/26、2/23、3/16、4/20、4/26（シギ・チドリ類調査）、5/10（合計 13 回）

4 年間確認種数(1996) 91 種

5 全種類数の変化



6 総個体数の変化



全種類数は 4 月、総個体数は 12 月が最も多くなった。12 月はユリカモメ 1361 羽だった。

7 全種類（外来種を含む）の最大個体数上位 5 種(1996)

順位	種	個体数	優占度 [%]
1	ユリカモメ	1361	17.1
2	ヒドリガモ	1333	16.8
3	マガモ	1209	15.2
4	ウミネコ	714	9.0
5	コガモ	438	5.5

ユリカモメ、ヒドリガモ、マガモの 3 種で全種類個体数のほぼ半数（49.1%）を占めている。

8 確認された希少種(1996)

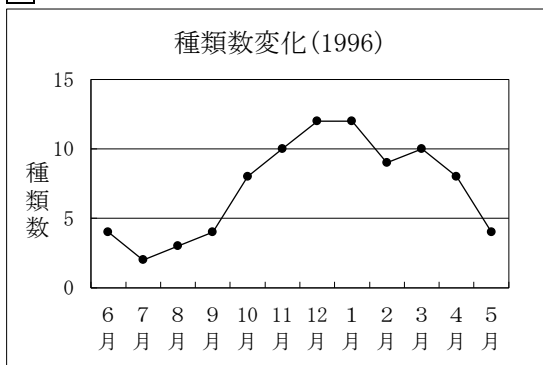
カテゴリー：危急種(V)，希少種(R)

種名	環境省	種名	環境省	種名	環境省
トモエガモ	R	ホウロクシギ	R	ミサゴ	V
カンムリカイツブリ	V	アカアシシギ	R	ハヤブサ	V
カラシラサギ	R	コアジサシ	R		

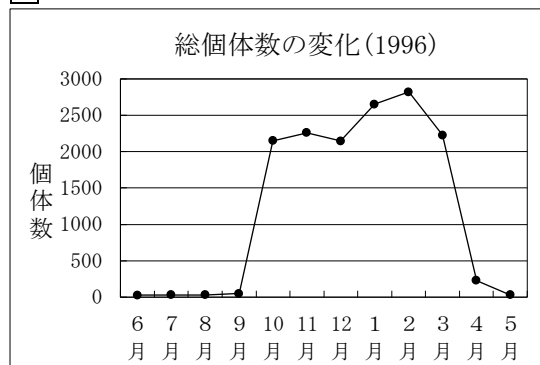
1991 年に策定されたカテゴリーを使用した。

種の配列は「日本鳥類目録改訂第 7 版」（日本鳥学会（目録編集委員会）編、2012、日本鳥学会）による。

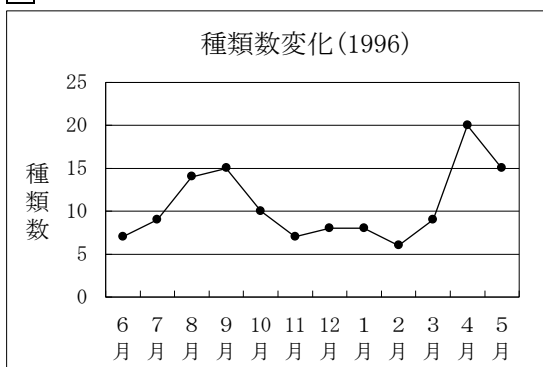
9 カモ類種類数の変化



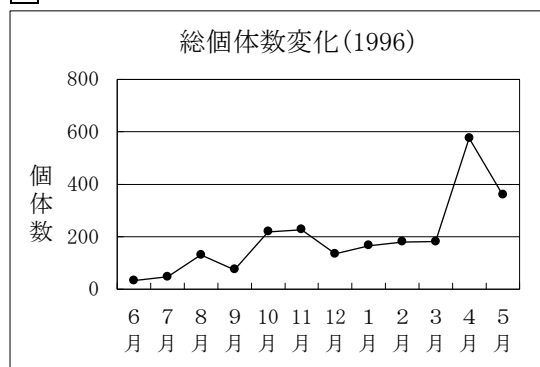
10 カモ類総数の変化



11 シギ・チドリ類種類数の変化



12 シギ・チドリ類総個体数の変化



種類数、総個体数とも4月が最も多くなった。

13 今年度の状況

◆1996年06月16日(日) 13:00~16:00 快晴

雨の中の実施を覚悟していたが、幸か不幸か当日は雲一つない快晴となった。前回と同様に北岸と南岸に分かれて、河口部から上流へと調査した。当然シギ・チドリ類は少なく、カモ類も旅立った後で、干潟は寂しいかぎりである。今回から全種類をラインセンサスの要領で調査することにしたが、種類も数も増えない。その上ジリジリと容赦なく太陽が照り付け、すぐに汗が噴き出す。それでも予定通り調査は進み、16時に貯木場をカウントして終了した。調査は、楽しいこともあれば苦しいこともあるということでしょうか。

[調査参加者]

秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、小川次郎、桑原文典、白石勝博、末岡高則、水口玲子、水野静子

◆1996年07月14日(日) 13:00~15:30 晴れ時々曇り

猛烈な暑さで、体の水分が蒸発してしまいそうである。とても長時間はやってられない。手際よく短時間で終わらせようとするが、集中力が途切れがちになる。

干潟はウミネコ色のように見えたが、丁寧に探すとシギ・チドリ類もいる。突然、「足の指もくちばしも黄色のサギがいる」の声に緊張が走る。確かにカラシラサギだ。冠羽をなびかせ、あのすどい顔つきでエサを追っている。すぐに北岸グループに無線で連絡をとるが、中州に生えたヨシの死角に入って見えないようだ。この時ばかりは暑さも忘れてしまった。

川口大橋より下流の南岸の堤は、きれいに草刈が行われていて、そのせいかセッカやホオジロ等が少ないように感じた。

[調査参加者]

秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、小川次郎、桑原文典、白石勝博、末岡高則、水野静子

◆1996年10月27日(日) 13:34~16:10 晴れ 干潮時刻15:37

さわやかな秋晴れ、ズグロカモメが出迎えてくれた今日の干潟は、カモでにぎやかだ。カモをカウントしているとあっちこっちで舞い上がる。こうなるともうお上手げ、落ち着いたのを待ってもう一度最初からやり直しとなる。そんなことを繰り返しながら、何とか調査を終えたら太陽が西に沈みかけていた。

最近、開発やレジャー等で人と野鳥との距離が接近してきている。そんな中で、人間のわがままぶりが目立つようになってきた。野鳥は、我々と同じスペースで生活している生き物である、相手を尊重する気持ちを持てな

いものか……。両足に釣り糸が絡まり、歩けないキアシシギを見てそんなことを思った。この河口が、人も野鳥もともに憩える場所であってほしいと願わずにはいられない。

〔調査参加者〕

岩本 孝、植田吉純、小川次郎、桑原文典、白石勝博、清水はつゑ、鈴木玲子、平井秀信、水野静子、中橋 巧、末岡高則

◆1996年11月10日(日) 14:20～17:20 曇り 干潮時刻14:42

カモ類に混じって、ウミアイサやカンムリカイツブリがいる。こういうお客さんを見つけるのも楽しみだ。上空では、ズグロカモメが急降下で存在をアピールしている。今日のカモ達は比較のおとなしかったが、寝ていたり、水に頭を突っ込んだりして識別に困った。ヨシ原には、黒や茶のサングラスをかけたツリスガラが、あちこちに見え隠れしている。

両足に釣り糸が絡まったキアシシギがまだ残っていた。飛ぶ力は弱々しく、かなり体力を消耗しているように見えた。糸を切ってやりたいくて、4人がかりで干潟の上を追いかけたが、相手は翼を持っている生き物、とても無理である。無事に越冬地へたどり着けるだろうか。秋の夕日はつるべ落とし、たちまちあたりは薄暗くなり、川口大橋上流でやっとオジロトウネンを識別したらもう何も見えなくなってしまった。貯木場で北岸グループと合流し、今日のまとめをして終了した。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、桑原文典、谷川昭司、水野静子、水口玲子、中橋 巧、末岡高則

◆1996年12月22日(日) 13:45～17:20 晴れ 干潮時刻13:56

今日の調査は、研究センターから依頼されている、ガン・カモ・ハクチョウ類のモニタリング調査を兼ねて行った。白波が立つ強風の中でのカウントは、非常に困難な作業であった。望遠鏡が揺れ、細かいところが見えない。カモがたくさん居てくれるのはうれしいが、こんな日はつらい。

今ここでは、護岸の補強工事が行われている。建設省松山工事事務所の話では、地震対策のための工事だそうで、河口から川口大橋までの両岸すべてを行う予定とのことである。濁水は沈殿させてから排出するなど、ある程度は環境に配慮してくれているが、どうしても干潟の面積は狭められ、それだけ野鳥が生息できる範囲は小さくなる。今後どのような影響が出るか、注意深く見守って行かなければならない。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、大西 力、小川次郎、奥村芳文、桑原文典、白石勝博、末岡高則、水野静子、水口玲子

◆1997年1月26日(日) 13:58～17:00 晴れ 干潮時刻16:55

前回と同様、今回もガン・カモ・ハクチョウ類のモニタリング調査を兼ねていて、3人ずつの組になり、1種類を1人1回ずつ合計3回カウントする。数が多いと、大抵かなりの差が出てくる。これはいかにカウントが難しいかを表しているのであるが、カウント力を他人と比較することができ、良い練習になる。

冬の調査は、風との戦いでもある。強風にさらされながら寒さに耐え、目からあふれる涙を拭き拭きカウンターを押す作業は、とても楽しい……と言えるものではありません。しかし継続調査をすることによって、何気なく見るだけではわからない、鳥の種類の構成や季節変化がわかります。それによって自然をより詳しく分析することができ、ひいては環境と鳥の関係を知ることができるのだと思います。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、谷川昭司、小川次郎、白石勝博、末岡高則、辻田晋子、中橋 巧、水野静子、水口玲子、大西 力

◆1997年02月23日(日) 14:04～17:40 快晴 干潮時刻16:01

松山港地域FAZ構想の変更計画が承認され、伊予郡松前町地域まで範囲が拡大されることになった。これによって、重信川河口域はすっぽり企業関連施設に取り囲まれることになる。さてどんな影響が出るのであろうか。人も野鳥もゆったりくつろげる環境が失われていく。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、植田吉純、大西 力、岡 秀郎、白石勝博、末岡高則、辻田晋子、水野静子、水口玲子

◆1997年05月10日(土) 14:21～17:16 曇り 干潮時刻17:09

あれほどいたカモが姿を消し、オオヨシキリが「ギョギョシ、ギョギョシ」とヨシ原で叫んでいる。草叢ではホオジロの巣立ちビナが、親鳥の後を追いかけて餌をねだっている。また沖合海上ではアジサシ類が乱舞し、頻繁に見事なダイビングを披露してくれる。春の河口はにぎやかだ。

〔調査参加者〕

岩本 孝、植田吉純、岡 秀郎、小川次郎、白石勝博、中橋 巧、水野静子、水口玲子

2008年度重信川河口鳥類調査結果（2008年6月～2009年5月）

1 はじめに

2008年6月から2009年5月まで、1年間の調査結果を報告する。データは貯木場を含む。ホシムクドリは本調査初記録(2008/10/25)である。

2 調査参加者(2008)

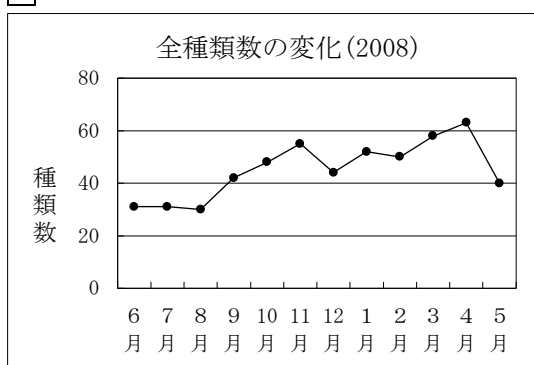
秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、宮岡速実、小川次郎、丹下一彦、本宮 典、伊延孝之（会員外）

3 調査日および調査回数(2008)

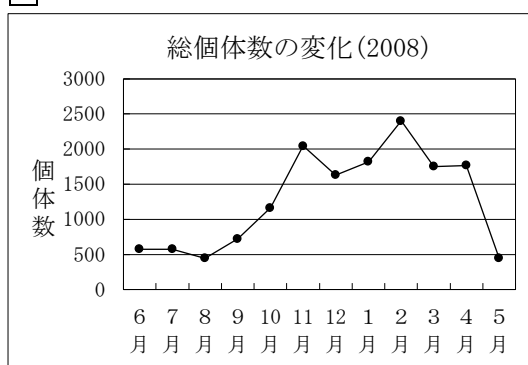
2008/6/14、7/12、8/24、9/13、9/27、10/25、11/15、12/13、2009/1/11（カモ類、シギ・チドリ類調査）、1/24、2/21、3/28、4/11、4/29、5/23（合計15回）

4 年間確認種数(2008) 91種（昨年度91種）

5 全種類数の変化



6 総個体数の変化



種類数は昨年度と同じく4月が最も多くなった。総個体数は、昨年度は4月が最も多かったが、今年度は2月が最も多くなった。2月はユリカモメ（174羽）とセグロカモメ（405羽）が年間最多を記録した。

7 全種類（外来種を含む）の最大個体数上位5種(2008)（ ）は昨年度の順位

順位	種	個体数	優占度 [%]
1(1)	ヒドリガモ	579	13.7
2(16)	ムクドリ	504	11.9
3(12)	セグロカモメ	405	9.6
4(4)	ハマシギ	273	6.4
5(9)	スズメ	201	4.7

ヒドリガモは数が減っている。ムクドリとセグロカモメは飛来数にむらがある。今回は、たまたま調査日に大きな群れが飛来したということだろう

8 確認された希少種(2008)

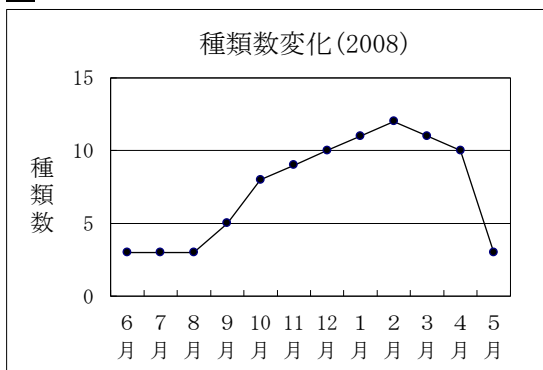
カテゴリー：絶滅危惧【ⅠA類(CR)、ⅠB類(EN)、Ⅱ類(VU)】、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)

種名	環境省	愛媛県	種名	環境省	愛媛県
ササゴイ		NT	コアジサシ	VU	EN
チュウサギ	NT	NT	ミサゴ	NT	NT
カラシラサギ	NT	CR	オオタカ	NT	VU
ホウロクシギ	VU	VU	ハヤブサ	VU	VU
ズグロカモメ	VU	EN	ビンズイ		VU

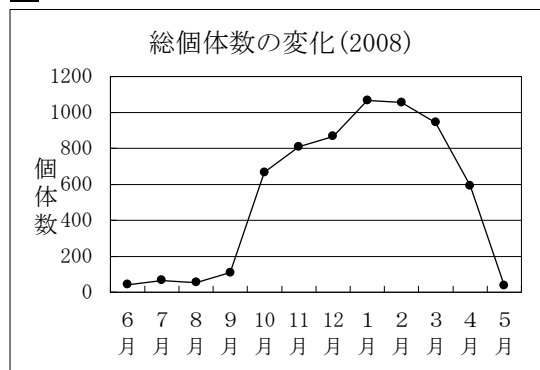
環境省は2006年に改訂、愛媛県は2003年に策定されたカテゴリーを使用した。

種の配列は「日本鳥類目録改訂第7版」（日本鳥学会（目録編集委員会）編、2012、日本鳥学会）による。

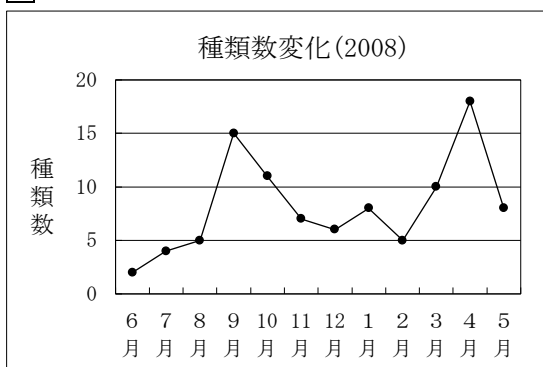
9 カモ類種類数の変化



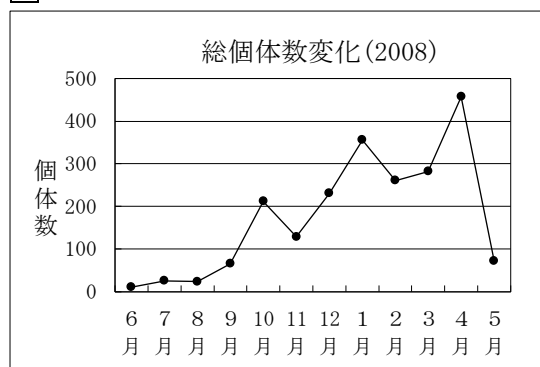
10 カモ類総数の変化



11 シギ・チドリ類種類数の変化



12 シギ・チドリ類総個体数の変化



種類数・総個体数とも最も少ないのは例年通り6月で、総個体数が最も多くなったのは、昨年度と同様今年度も4月だった。

13 今年度の状況

◆2008年6月14日(土) 10:50~12:40 晴れ 干潮時刻 12:15

例年のことではあるが、シギ・チドリ類などの旅鳥やカモ類などの冬鳥はほとんど姿を消し、夏鳥と留鳥のみとなって非常に寂しくなった。そんな中で、オオヨシキリやセッカがにぎやかにさえずり、カラシラサギが今年も姿を見せてくれた。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、岩本 孝

◆2008年7月12日(土) 08:50~10:50 晴れ 干潮時刻 10:18

オオヨシキリやセッカのさえずりも静かになってきた。今回オオタカが確認された。オオタカは冬鳥とされ、以前は夏場には観察されなかったが、最近ではしばしば観察されるようになった。また、重信川河口には4月から6月の間は姿を見せないが、この間は、余り遠出をせず営巣地付近でエサをとっているのであろう。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、岩本 孝

◆2008年9月13日(土) 13:24~15:50 曇り 干潮時刻 13:55

キリアイ、オオソリハシシギ、ホウロクシギは幼羽であることを確認した。前回と今回はシロチドリを確認することが出来なかった。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、本宮 典、岩本 孝

◆2008年9月27日(土) 13:15~15:30 晴れ 干潮時刻 13:49

ホウロクシギが泥の中にくちばしをつっこみ、ヤマトオサガニを引っ張り出して食べていた。まず、引っ張り出したヤマトオサガニを水辺に持って行き、脚をくわえて振り回しちぎる。そして脚のちぎれた胴体を呑みこむ。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、岩本 孝

◆2008年10月25日(土) 10:50~13:33 曇り 干潮時刻 12:41

ホシムクドリを確認した。本調査では初記録である。いよいよカモ類が渡来し始めたが、やはり今年も少ないようである。シギ・チドリ類がまだかなり残っている。重信川河口で越冬するダイゼンも姿を見せ始めた。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、岩本 孝

◆2008年11月15日(土) 14:30～16:58 曇り 干潮時刻 16:24

11月の調査において、重信川河口の優占種であるマガモとヒドリガモの合計は、2001年以前には1000羽を越えていたが、2002年からどんどん減り始め、今回は502羽であった。特にマガモの減少が著しい。猛禽類が姿を見せるようになり、カモ類や小鳥類に影響が出ているかもしれない。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、小川次郎、岩本 孝

◆2008年12月13日(土) 14:10～16:50 曇り 干潮時刻 15:35

川口大橋たもとの北岸側で、ヨシ原再生事業が始まった。これは国土交通省松山河川国道事務所が、重信川自然再生事業として行うもので、「重信川の自然をはぐくむ会」で検討の上実施している。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、本宮 典、岩本 孝

◆2009年1月11日(日) 14:55～17:03 曇りのち雨 干潮時刻 15:33

ホオジロガモを1羽確認した。カモ類の数はさらに減少している。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、岩本 孝

◆2009年1月24日(土) 14:20～16:35 曇り時々雪 干潮時刻 14:46

12月と1月の調査では、ズグロカモメを確認できなかった。例年なら数羽程度は確認できるのであるが。昨年当たりから減ってきている。ツクシガモも確認できなかった。

〔調査参加者〕

秋山 勉、丹下一彦、宮岡速実、谷川昭司、本宮 典、伊延孝之(会員外)

◆2009年2月21日(土) 13:30～16:25 快晴 干潮時刻 13:59

オカヨシガモはいつもガスタンク横の池に群れ、他の場所にはほとんどいない。これがオカヨシガモの習性であるなら興味深い。ハジロカイツブリ7羽の群が姿を見せた。重信川河口では、ハジロカイツブリを見ることが出来る機会はそう多くない。姿を見せたとしても1羽かせいぜい数羽である。これほどの数は初めてのことである。

〔調査参加者〕

秋山 勉、丹下一彦、谷川昭司、岩本 孝

◆2009年3月28日(土) 14:15～16:40 曇り 干潮時刻 16:03

鳥の動きが活発になってきた。夏鳥のツバメが渡来し、旅鳥のシギ・チドリ類が姿を見せ始めた。やがてカモ類などの冬鳥は旅立って行くが、しばらくはにぎやかな日が続く。シロチドリがスクレイピングディスプレイを始めている。雄が足で砂をかきだして砂地にくぼみを作り雌に示す。これを繰り返して巣を決める。これはなかなかほほえましく、おもしろい光景である。

〔調査参加者〕

秋山 勉、丹下一彦、谷川昭司、岩本 孝

◆2009年4月11日(土) 15:00～17:30 快晴 干潮時刻 15:57

潮干狩りのため、多くの人が干潟に入っていた。鳥は人が動くたびに右往左往する。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、本宮 典、岩本 孝

◆2009年4月29日(水) 15:15～18:00 快晴 干潮時刻 17:46

久しぶりにオグロシギが姿を見せた。コアジサシは以前に比べると群が小さい。今日も潮干狩りのためたくさんの方が干潟に入っていた。

〔調査参加者〕

秋山 勉、丹下一彦、谷川昭司、岩本 孝

◆2009年5月23日(土) 13:30～15:40 晴れ 干潮時刻 13:57

非常に多くの人が干潟に入っているため、鳥が分散している。シギ・チドリ類の渡来ピークは過ぎたが、キアシシギはピークが遅いので比較的数量が多い。

〔調査参加者〕

秋山 勉、宮岡速実、谷川昭司、本宮 典、岩本 孝

2020 年度重信川河口鳥類調査結果 (2020 年 6 月～2021 年 5 月)

1 はじめに

2020 年 6 月から 2021 年 5 月まで、1 年間の調査結果を報告する。データは貯木場を含む。ガスタンク横の池がホテイアオイで覆われてしまった。

2 調査参加者(2020)

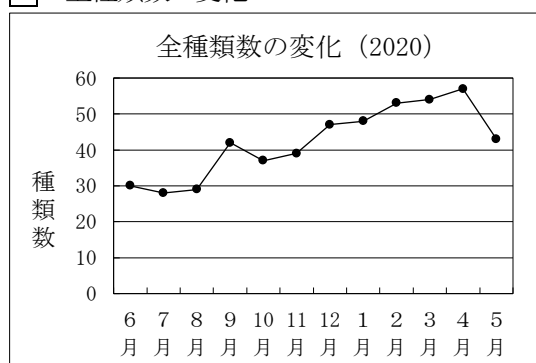
秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人、大瀬戸光明、本宮 典、藤堂恵子

3 調査日および調査回数(2020)

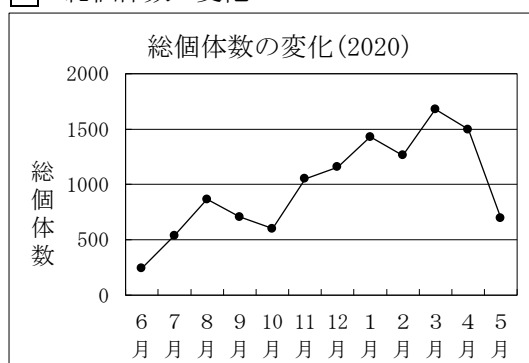
2020/6/6、7/18、8/1、9/5、9/26、10/18、11/14、12/12、2021/1/11、1/24、2/11、3/13、4/10、4/24、5/8
(合計 15 回)

4 年間確認種数(2020) 92 種 (昨年度 88 種)

5 全種類数の変化



6 総個体数の変化



種類数が最も多いのは 4 月であったが、総個体数が最も多いのは 3 月であった。これは 3 月にカワウ (116 羽)、ヒドリガモ (347 羽)、ハマシギ (179 羽) などが比較的多かった上に、ユリカモメが年間の最大数 (196 羽) だったからである。

7 全種類 (外来種を含む) の最大個体数上位 5 種(2020) ()は昨年度の順位

順位	種	個体数	優占度 [%]
1(11)	ウミネコ	623	16.5
2(1)	ヒドリガモ	402	10.7
3(4)	ハマシギ	221	5.9
4()	ユリカモメ	196	5.2
5(14)	ツバメ	185	4.9

ウミネコは過去 2 番目の記録数である。
ユリカモメは昨年度記録されなかった。

8 確認された希少種(2020)

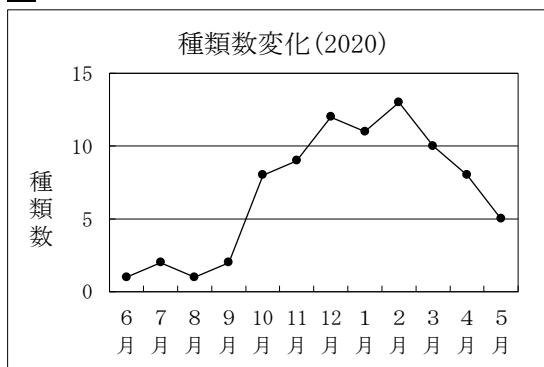
カテゴリー: 絶滅危惧【ⅠA類(CR)、ⅠB類(EN)、Ⅱ類(VU)】、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)

種名	環境省	愛媛県	種名	環境省	愛媛県
ツクシガモ	VU	VU	ハマシギ	NT	
トモエガモ	VU	NT	ズグロカモメ	VU	VU
ササゴイ		NT	コアジサシ	VU	VU
チュウサギ	NT		ミサゴ	NT	NT
クロツラヘラサギ	EN	CR+EN	ハイタカ	NT	
シロチドリ	VU	VU	オオタカ	NT	VU
オオソリハシシギ	VU	VU	ノスリ		DD
ホウロクシギ	VU	NT	ハヤブサ	VU	VU
ミユビシギ		VU	ビンズイ		VU

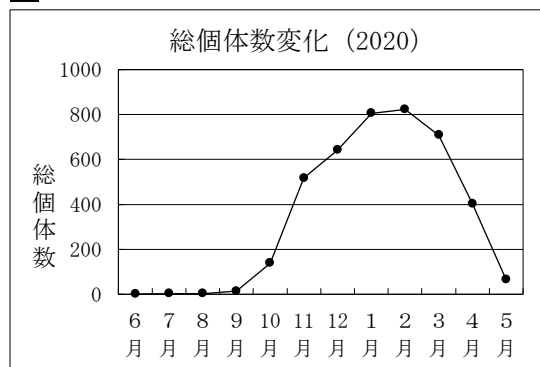
環境省は 2020 年、愛媛県は 2014 年に改訂されたカテゴリーを使用した。

種の配列は「日本鳥類目録改訂第 7 版」(日本鳥学会(目録編集委員会)編、2012、日本鳥学会)による。

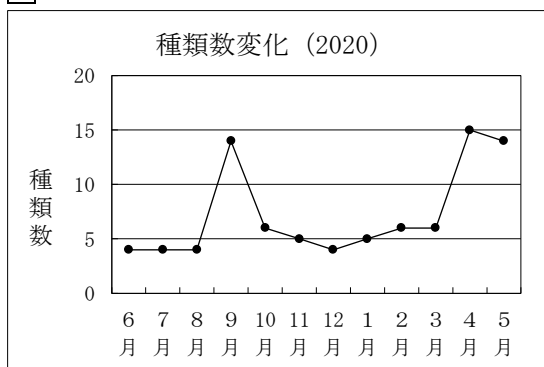
9 カモ類種類数の変化



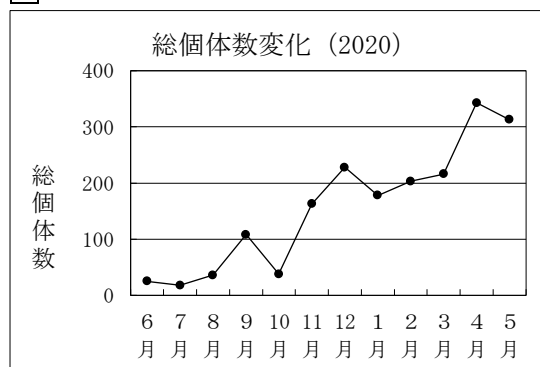
10 カモ類総数の変化



11 シギ・チドリ類種類数の変化



12 シギ・チドリ類総個体数の変化



種類数は4月が最も多くなった。総個体数も4月が最も多くなったが、これはハマシギ (221羽)が多かったことによる。

13 今年度の状況

◆2020年6月6日(土) 14:20~17:28 曇り 干潮時刻 15:12

ムクドリがさくらんぼを食べに来ているのが騒々しい。ヒナもいるようだ。シロチドリやハクセキレイ、ハシボソガラスなどのヒナも見られた。

驚いたことに、クロハラアジサシが池(ガスタンク横の)にかかっている電線にとまっていた。アジサシ類が電線にとまるのはそうそうないのではないだろうか。指は細いものをつかむようにはできていないのだろう、電線に乗っているだけの状態なので、横にムクドリが止まると電線がゆれ、クロハラアジサシは前後に大きく揺れる。こらえるのに必死の様子で「やめろー」という声が聞こえてきそうだった。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人、大瀬戸光明

◆2020年7月18日(土) 12:55~16:15 晴れのち曇り 干潮時刻 13:24

先日の豪雨(「令和2年7月豪雨」)でさらに土砂が堆積し今まで水面だったところもいくつか埋まってしまった。そんな中クロツラヘラサギが飛来していた。本調査では昨年(2019.9.28)に続いての確認である。浅瀬でくちばしを半開きにし、横向きにタッタッタと小走りで餌をとらえている。くちばしをよく見ると先端が少し曲がっているが、これも餌をとるのに都合がいいのだろうか。サギ類とは全く違った餌の捕り方でなかなか面白い。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2020年8月1日(土) 13:08~16:24 晴れのち曇り 干潮時刻 13:24

順位	個体数	調査日
1	714+	1996年 7月 14日
2	623	2020年 8月 1日
3	621	2010年 8月 21日
4	619	1998年 11月 22日

ウミネコを623羽カウントした。200~300羽の記録は時々あるが、このような大きな群れは久しぶりだ。本調査では左表のように過去2番目の記録である。

〔調査参加者〕

岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2020年9月26日(土) 9:40~13:00 晴れ 干潮時刻 10:47

クロサギが姿勢を低くして翼を半開きにし、マントのように水面を覆って影を作っていた。魚をおびき寄せる

ためなのか。クロサギは主に岩礁地帯に生息するとされているが、重信川河口では時々観察される。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2020年10月18日(日) 13:58～17:03 晴れ 干潮時刻15:58

ガスタンク横の池がホテイアオイで覆われ、水面はわずかししか見えない。この状況ではオカヨシガモは入れないだろう。例年、重信川河口に渡来する大部分のオカヨシガモはこの池に入っている。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2020年11月14日(土) 12:48～17:05 快晴 干潮時刻14:17

ガスタンク横の池は完全にホテイアオイに覆われてしまった。水面は全く見えない。心配していたオカヨシガモは、干潟ではなく貯木場に避難していた。オカヨシガモは周囲が囲まれた狭い空間を好むのかもしれない。晩秋だというのにウグイスのさえずりが聞こえた。このところの暖かさの影響か。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人、大瀬戸光明

◆2021年1月11日(月・祝) 13:33～16:54 曇り 干潮時刻14:04

どこで学習したのか、1羽のハシボソガラスが、殻を割るためカキをくわえては飛び上がって上空から落とすという行為を繰り返していた。ツクシガモは本調査で2013年2月9日以来、ビンズイは2015年11月7日以来の記録である。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2021年1月24日(日) 11:45～16:20 曇り 干潮時刻12:40

干潟に居たカモはたったの2羽。こんなことは過去に例がない。死んだ魚にハシボトガラスが群がり、その周囲でハシボソガラスが様子をうかがっていた。力関係はやはりハシボトガラスの方が上か。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2021年2月11日(木・祝) 13:45～17:22 晴れ 干潮時刻15:28

ツクシガモが2羽滞在している。1月11日の調査で確認した個体と同一個体か？池がホテイアオイで埋まっているためオカヨシガモは貯木場へ移動している。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

◆2021年3月13日(土) 14:13～18:00 晴れ 干潮時刻15:34

アカハラ、ヒレンジャクは本調査では過去1度だけ記録がある（アカハラ：2013.04.27、ヒレンジャク：2010.04.18）。今シーズン、ヒレンジャクは各地に飛来したようで、私の自宅周辺にも200羽近い群れが連日飛来し（左の写真はその一部）、街路樹として植えられているクロガネモチの実を食べつくして去っていった。アカハラは渡り途中に立ち寄ったのだろう。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人、大瀬戸光明

◆2021年4月10日(土) 13:50～18:05 晴れ 干潮時刻14:38

左岸側でイカルチドリヒナを目撃した。また、右岸先端部の砂浜ではシロチドリが擬傷行動をとったので、近くにヒナがいたと思われる。とすれば産卵は3月中旬か。

〔調査参加者〕

秋山 勉、岩本 孝、谷川昭司、脇 啓人

重信川河口で記録された希少種の例

レッドリストカテゴリー：絶滅危惧【ⅠA類(CR)、ⅠB類(EN)、Ⅱ類(VU)】、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)

		
ヒシクイ <i>Anser fabalis</i> 2013/10/27 谷川昭司 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省)		ツクシガモ <i>Tadorna tadorna</i> 2017/01/25 大瀬戸光明 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県)
		
ササゴイ <i>Butorides striata</i> 2020/09/22 大瀬戸光明 準絶滅危惧(NT) (愛媛県)		カラシラサギ <i>Egretta eulophotes</i> 2006/10/15 岩本 孝 準絶滅危惧(NT) (環境省、愛媛県)
		
クロツラヘラサギ <i>Platalea minor</i> 2018/10/01 大瀬戸光明 絶滅危惧ⅠB類(EN) (環境省) 絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) (愛媛県)		マナヅル <i>Grus vipio</i> 2007/01/01 岩本 孝 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県)
		
シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus</i> 2021/04/11 谷川昭司 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県)		セイタカシギ <i>Himantopus himantopus</i> 2019/09/29 谷川昭司 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省)

レッドリストカテゴリー：絶滅危惧【ⅠA類(CR)、ⅠB類(EN)、Ⅱ類(VU)】、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)

		
オオソリハシシギ <i>Limosa lapponica</i> (両端) 2019/10/03 大瀬戸光明 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県)		ホウロクシギ <i>Numenius madagascariensis</i> 2020/04/18 大瀬戸光明 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省)、 準絶滅危惧(NT) (愛媛県)
		
アカアシシギ <i>Tringa totanus</i> 2010/03/27 岩本 孝 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省)		カラフトアカアシシギ <i>Tringa guttifer</i> 2010/09/23 谷川昭司 絶滅危惧ⅠA類(CR) (環境省)
		
ハマシギ <i>Calidris alpina</i> 2020/10/31 谷川昭司 準絶滅危惧(NT) (環境省)		ズグロカモメ <i>Larus saundersi</i> 2019/12/12 谷川昭司 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県)
		
コアシサシ <i>Sterna albifrons</i> 2021/06/02 谷川昭司 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省、愛媛県)		オオタカ <i>Accipiter gentilis</i> (幼鳥) 2019/12/07 大瀬戸光明 準絶滅危惧(NT) (環境省) 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (愛媛県)

考察

25年間で重信川河口の環境は徐々に変化してきた。河口部左岸側で護岸工事が行われ干潟が掘り返されたことや、大雨による増水で土砂が堆積し底質が変化してしまったことなど。その結果、干潮時に現れる湿地帯や水域も狭くなってしまった。

鳥類全体でみると年間にカウントされる種類数、総個体数ともに減少している。このことは重信川河口が鳥類にとっては住みにくい環境になってきていることを示している。

カモ類については、マガモやハシビロガモの個体数減少が著しい。個体数が安定しているのは、オカヨシガモとカルガモのみである。これらの種は貯木場に入っていることが多い。オカヨシガモは、ホテイアオイで覆われる前まではガスタンク横の池に好んで入っていた。これらの場所は干潟の環境に左右されないのだからこういう結果になっていると思われる。

シギ・チドリ類については、チュウシャクシギの減少が著しい。調査開始当初は200羽ほどカウント出来ていたのに、最近では30羽程度となっている。餌が採れなくなっているのではないかと推測している。オジロトウネンなど全く確認できなくなった種もいる。シギ・チドリ類は餌を干潟等の湿地に依存しているだけに、種類数と個体数は干潟生態系の豊かさを示していると言える。現在、重信川河口では、シギ・チドリ類が多くみられるのは河口部右岸先端部分だけになってしまった。

また、河口部の砂浜ではシロチドリが繁殖している、シロチドリは絶滅危惧Ⅱ類（Ⅱ）に指定されていて個体数が減少している種である。砂浜はレジャーなどで人も利用する場所であり、しかも、カラスなどに狙われやすく繁殖率は極めて低い。同じ絶滅危惧Ⅱ類（Ⅱ）に指定されているコアジサシは過去に繁殖したことがあったが、今回久しぶりに河口部右岸先端部の砂浜で営巣した。2021年5月中旬から下旬にかけて合計8番の営巣を確認し、6月1日にはそのうち1番に2羽のヒナが誕生した。このように両種にとってこの砂浜は重要な場所であることから、人による繁殖阻害を防止するため2021年5月30日から2021年7月31日までの間、愛媛県と協力して保護柵を設置した。今後もこの両種はここで繁殖する可能性があるため、繁殖期には保護柵を設置する予定である。

スズメ目については、ツバメがヨシ原をねぐらにしていることがわかっている。ヨシ原は、オオヨシキリの繁殖場所にもなっているため保全が必要である。また、夏鳥のクロツグミやオオルリ、キビタキなど本来は山地の森林に生息する種も記録された。このことから重信川河口は渡りの中継地になっていることが分かる。河口周辺の樹木を整備すれば、これらの渡り鳥は中継地として利用するのではないと思われる。

調査を開始してからつくづく残念に思ったのは、過去のきちんとした記録がないことだった。重信川河口にどんな種類の鳥がどれだけいたのだろうか。この報告書はそういう意味で将来のためにきちんとした記録を残そうと思い作成した。少なくともはいえまだ多くの鳥類が生息する場所であり、多くの希少種も飛来する中予唯一の干潟である。今後もシロチドリとコアジサシの繁殖保護活動を継続しつつ、調査を通じて鳥類保護や干潟環境の保全に努力したい。

悲しいのは、上流から流れてくるごみが非常に多いこと、河口周辺に不法投棄が多いこと、ゴルフの練習でボールを干潟に打ち込む人がいることなどである。休日には多くの人が訪れ、大人も子供も自然に親しみ楽しめる重信川河口である。この環境を未来に残すため、みなさんの協力をお願いしたい。

おわりに

調査開始当初は10年続けばいいかなと思っていたが、ここまで続けられたのは多くの日本野鳥の会愛媛会員に協力していただいたおかげである。この調査を継続するためには、調査範囲が広いので多くの調査員が必要である。今後ともご協力をお願いしたい。

また、この報告書で指摘したように重信川河口の環境は明らかに悪化している。特に土砂の堆積で干潟の機能が失われていると思われる。干潟は長い年月をかけて作られてきたもので、安易に手を加えるべきではないと思うが、現状のままではさらに悪化する可能性がある。管理者である国土交通省松山河川国道事務所には専門家を交えて、干潟再生への検討をお願いしたい。

（報告書作成責任者 岩本 孝）

参考文献

- 中村登流・中村雅彦（1995）『原色 日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞』保育社。
- （財）日本野鳥の会山口県支部（1994）『山口県内の水鳥の生息状況調査報告書（シギ・チドリ類編）：山口県下におけるシギ・チドリ類一斉調査 21 年間のまとめ 1973～1993』（財）日本野鳥の会山口県支部。
- 日本野鳥の会愛媛（2020）「野鳥情報」『コマドリ』2020 年 9・10 月号 No. 258 日本野鳥の会愛媛。
- 日本鳥学会（目録編集委員会）編（2012）『日本鳥類目録 改訂第 7 版』日本鳥学会。
- 環境省自然環境局生物多様性センター「ガン・カモ類の生息調査 都道府県別調査結果」
https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html。
- 百瀬淳子（1998）「アビよ風を起こせー伝統漁法復活の試み」『野鳥』1998 年 7 月号 No. 612, pp. 28-31 日本野鳥の会。
- 朝日新聞（2012）「シギ、干潟の膜ペロッ」3 月 8 日朝刊。
- 野鳥の会愛媛東予地区連絡会（2008）『愛媛県東予地方鳥類目録』野鳥の会愛媛東予地区連絡会
- 浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦（1985）『山溪カラー名鑑 日本の野鳥』（高野伸二編）山と溪谷社。
- 森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男（1995）『図鑑 日本のワシタカ類』文一総合出版。
- （財）日本野鳥の会愛媛県支部編（1992）『愛媛の野鳥観察ハンドブック はばたき』愛媛新聞社。



ハウロクシギ
Numenius madagascariensis

重信川河口鳥類調査報告書

1996.6－2021.5

2023年9月25日発行

編著者 重信川河口鳥類調査研究グループ
岩本 孝 編著
秋山 勉・谷川昭司・脇 啓人 著

発行者 日本野鳥の会愛媛

本誌掲載の記事、データ、図表等の無断転載を禁じます。

この報告書は2023年度（令和5年度）「三浦保」愛基金の助成を受けて作成しました。

